

## 「阿波から安房そして神津島 阿波命神社」ミニシンポジウムを実施して H23年度離島人材育成基金助成事業 H23.4.1 ~ H23.7.31

神津島郷づくり研究会

### 始めに「神津島港みなとまつり」ありき

中央の行財政改革下、公共投資等大幅な削減や観光等島産業の不振で低迷が続いている島経済、加えて少子高齢化や村落中心部の空洞化による人口減少も深刻です。これら沈静化の暗雲を払拭し、元気な島を取り戻すべく草の根協議を続けてきました。明治初期の産業革命に端を発した海上交通の近代化の下、M44年12月本島に初めて動力船が導入されると村史にはあります。古来より漁業を生業としてきたここ神津島において、港づくりは、時化や豪雨で定まらない船着き場に難儀していた事もあって喫緊の課題となっていました。そんな中、大正14年脆弱な島財政下で、機材もセメントも無い中、起債と島民の労力奉仕を頼りに村の単独事業として港づくりは始められました。島民にとって港は、文字通り暮らしの生命線であります。島を挙げ知恵を出し合い、城壁づくりの石積工法を模し、島産の石材を切出し伝馬船での海上運搬で現場へ搬入するという人海戦術で、歳月をかけ台風にも耐え得る立派な防波堤を遂に完成させたと伝えられています。この時の防波堤を基幹として、港づくりはその後延々と今日まで続けられ今年で86年目となります。初期の工事は危険が伴い犠牲者も出る中、文字通り血と汗と涙の結晶とも言える偉業を讃えるとともに、神津魂ともいべき先人の心を永く後世までも伝えていかなければならない思いから、「神津島港みなとまつり(仮)」を模索して来ました。

築港前から着港初期の前浜港



漁船はこのような毎日砂浜に揚げ降しされていた。汽船から降された貨物の“背さきランバー”等の重たい



年間約100日位を労力奉仕に費して築港に尽力したという村民の作業ぶり



昭和3年頃の神津島港

最も難しゅうを極めた「マナイ」と「池内カマ」の間の防波堤作りには先人達の血と汗がにじみ出ているようである。昭和7年頃の工事



防波堤はまだ「マナイ」まで安全につながらないが船揚場は出来上って案になった。漁船の形もなつかしい。

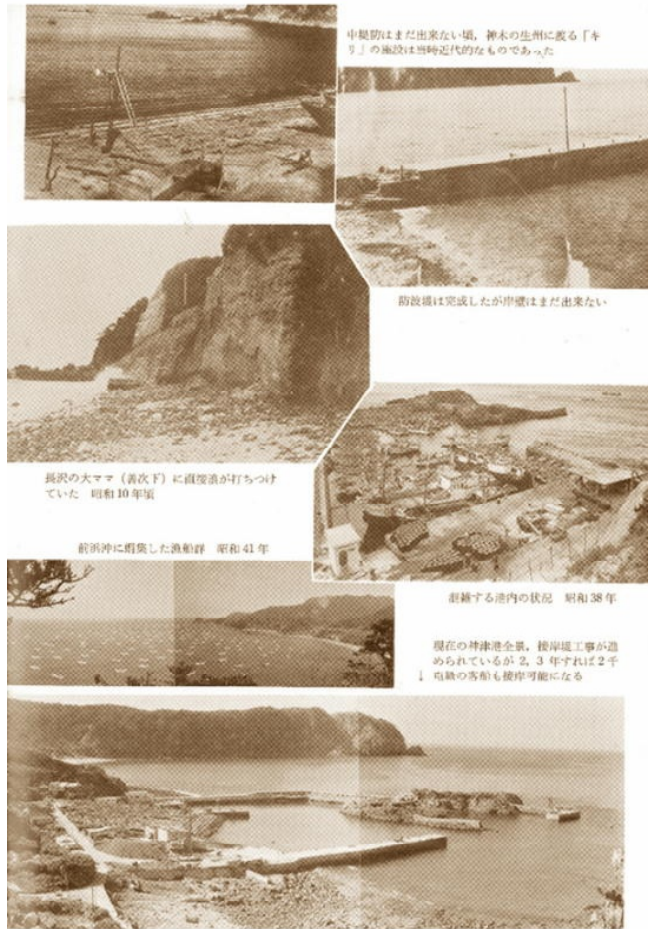


写真で見る百年の歩み  
(1968/明治百年記念)

### コミュニティ再生とアイデンティティの再構築を

2000年のミレニアム大震災の年、最後の戦前派ともいえる1944年生まれの神中卒業生が何年振りかの同窓(級)会を島外で実施しました。在島組と島外組20余名が一堂に会し、昔話は勿論のこと話題は震災の話で沸騰しました。後を引いたかの様に2004年に還暦同窓(級)会、続いて2009年には年金同窓(級)会と続けられました。そしてこの機会に、神小六年の時クラスを挙げて始めた長野市吉田小との文通を、ひとり50年間も続けていた一組がいた事で交流が再開されました。この交流再開を基軸に、崩壊したコミュニティが、喪失したアイデンティティの其れなりの復活が期待できるのではないだろうか。そんな淡い思いから島興し運動が芽生えていきました。便利さと豊かさと情報化の下、崩壊した地域コミュニティ、それとともに色褪

せた地域性は、歴史の中に埋もれ最早欠片も見当たらない程になってしまっていました。



自給自足から貨幣経済へと経済優先の下、時代の大きな変化によって失ってしまったアイデンティティの再構築、そのひとつが地域資源を活かしたモノづくりにあるものと確信していました。それからあともうひとつは、地域の歴史を掘り起こす事でそれが見出せるかも知れないと…。交流再開を基盤とした、「あしたばおやき商品化」事業を通して、神秘の島のイメージをキーワードとした歴史の掘り起こし、モノづくり、コトづくりの道筋が立てられました。

## 阿波も粟、安房も粟...

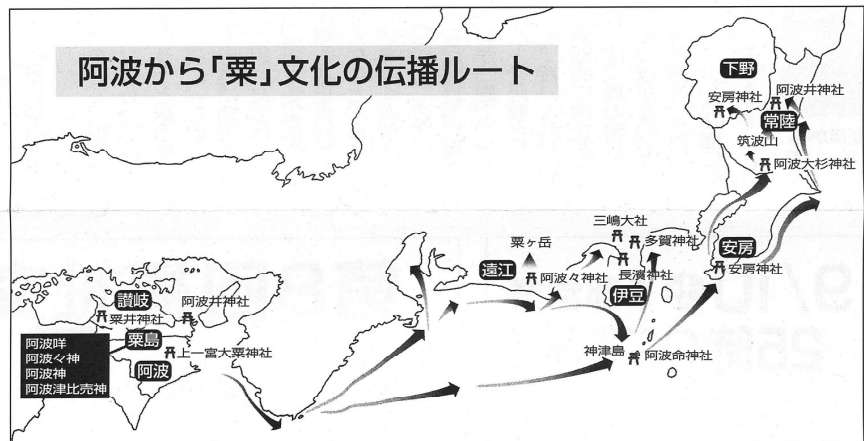
我が国の正史に最初に登場する島はここ上(神)津島とのことです。続日本後紀仁明天皇の条に 承和七年(840年)九月伊豆の国に言ふ 加茂郡に造作の島あり。本の名を上津島と名づく。この島に坐はします阿波の神は三島大社の本后なり。又物忌奈命は即ちさきの社の御子神なり。また承和五年

(838年)七月五日夜火上津島の左右の海中より出ず。焼炎は野火の如し。十二童子は相接して炬を取り海に下り火をつく。諸の童子は潮を履むこと地の如く地に入ること水の如し。上の大石を震はし火をもって焼きほろぼす。また三島大明神縁起(三宅記)には 七日七夜をかけて十の島々を焼出し 一番の島をば初島と名付けタミの木を植え... 第二の島をば島々の中程に焼出し神達集まり給いて詮議ありし島なれば神集(津)島と名付け給えり 等々神津島は多くの神話に纏わる伝説が伝えられています。旧伊豆国には大社が五社あり、そのうち物忌奈命神社と阿波命神社の二社がここ神津島に祀られています。阿波や安房の国名は、五穀の粟を祖としている事が、民族学者宮本常一先生の著書には記されています。うつぼを食する同一の食文化や古来より半農半漁を生業とし、定期航路こそないものの漁船や人の行き来があった事など僅かながら分っていました。しかしながら今回のシンポジウムを通して、凡そ千三百年余(?)前に阿波徳島を拠点とする阿波忌部族の南房総への東遷の際、ここ神津島が伊豆半島とともに黒潮の流れに沿った海上交通の要であった由縁で阿波命が祀られた事など知る由もありませんでした。思いも寄らないこれほどの深い関係にある事を知ったのは、ほとんどの島民がしかも歴史上初めての事でした。焼山 面房(台地) 与種山 与種様(大明神) 麻神沢 宮原 上(神)里 宝崎 大里 大のみ 大沢(麻?) 宮平 天上山 宮塚山 神戸山 花館山 鳥居ヶ沢 高部(カハ/神饌魚) 閻魔堂 舟戸ヶ沢 鍛冶沢 神木島 地内鎌 鎌ヶ下 籤祭 二十五日様 火被神秋葉

明神・愛宕明神 入ヲイガ 沢 阿麻(女/にゅう:男)イボ(ト)ジリ等字名や方言、神事等々阿波忌部との由縁や一致点が多々ありそうな事に気付かされました。 ♪阿波の命の伝えも古きよゆかし懐かし神津島～ ♪神津滝川の観音様へ 二十四文の麻糸を上げて 上げた麻糸で縁結び

## 穀霊神の阿波咩命と海洋神の事代主命

神津島の阿波咩神は、島づくりの神様、事代主命の後神で長浜様として島民に崇敬されてきました。大宜都比売は、阿波国の国神で古事記にも再々登場し、日本の養蚕・穀物起源伝承を伴っているそうです。またイザナギとイザナミの十二番目の御子であり、大気都比売、大宜津比売、阿波咩命、阿波波神、阿波神、天津羽羽神、大御膳都神、豊宇気毘売神、豊受大神これらの呼び名は全て阿波咩命の別名との事です。一方、これまで事代主命は出雲神とされてきましたが、今回のシンポでは、日本唯一神名の「事代主神社」のある阿波徳島が本貫地であったとの説が唱えられ、場合によると諸島の開拓神の歴史認識は大きく変わる事になるかも知れません。



## 与種様や二十五日様は更なる検証を

優秀な種を携えて、日本各地へ進出した阿波忌部族によって開拓された神津島の歴史文化史が、神秘のベールが一枚宛剥がされ点から線へそして面へと繋がっていく様に解き明かされていきました。阿波徳島を出発点として、紀伊半島から熊野灘を経て渥美半島、伊豆半島や三浦半島そして南房総等々いろいろな地域と関わりあることも分ってきました。昔、種を持って来た神を祀ったと言う伝承のある昆陽祭祀の与種山の与種様(大明神)縁起については、再検証課題となりそうです。また、イボジリ(阿波語:カマキリ)が祭祀に欠かすことのできない二十五日様祭事(旧暦 1月 24・25日)についても、祖は焼畑農耕における豊饒祈願祭としての位置付けなど、今後研究者のスポットが当てられるよう期待したいと思います。

## ホームページ(HP)公開と阿波踊り誘致に向け

今回のシンポジウムにより、神津島のみならず伊豆諸島の新たな歴史認識を持つことができました。神津島から八丈島へ伝えられた阿波踊りの祖、回り踊や歌垣の共通した風習が残されているなど、これら歴史文化資源は、文字通り手付かずのお宝が眠ったままの状態と言えます。阿波徳島と言えば阿波踊り。これに全島挙げて、かつての忌部魂を持ってして当たれば、「神津島港みなと祭りのメインに阿波踊りを！」の動機付けである今回の目的は、展望が開かれるである事を確信しました。神津島に相応しい神津阿波踊り誘致は決して夢ではないことを。そして、「離島」は海に囲まれているという旧来の概念は、海で続いているという発想転換を強く感じると同時に、古の人びとは街づくりについて高い空からでも見てやっていたのだろうかと考えさせられる思いです。東海道即ち - 東の海の道 - とはよくぞ言わしめたものです。今回事業を通し感じた事は、新たな時代の郷 シマ づくりを実現するものであり、HP 公開は、これを加速推進する資産になると確信するものです。